

2022年9月21日

博報堂教育財団 第15回、16回「日本研究フェロシップ」

成果報告書

I. 研究成果概要

氏名 (フリガナ) 在住国名	水川 淳 (ミズカワジュン) アメリカ合衆国
所属・役職	レイクフォレストカレッジ・社会人類学部&宗教学部 非常勤講師
招聘回 (招聘研究期間)	第16回 (2021年9月1日～ 2022年8月31日) (2021年9月1日～2022年8月25日)
受入機関	東京外国語大学
招聘研究テーマ	生命の宿る世界の果ての生態系:3.11津波に被災した東北沿岸漁村におけるコミュニティ先導型復興事業
研究目的	宮城県沿岸部での復興事業の取り組みを、歴史的背景や地形、習俗や生活文化を踏まえ包括的に考察する。
研究成果概要	
1. どのように研究を進めたか (具体的に) 宮城県気仙沼市M地区にて、住民主導型復興事業の活動の場を中心に、聞き取り調査・参与型観察・一次資料の収集と分析を定期的実施。これに並行して、宮城県仙台市沿岸部A地区の元住民が企画・運営する活動での参与型観察と、元住民や支援者に対する聞き取り調査も定期的に行なった。さらに、生態学等の研究者が宮城県内の被災沿岸部で継続しているモニタリング・調査に同行し、地形と生活文化の密接な関係性への見地を深めた。一次資料の収集と分析は、主に、せんだいメディアテーク、市立図書館・資料館、調査地区集会所に所蔵されている書籍・資料・展示物を中心に活用し、必要に応じて個人所有の歴史的資料や報告書、写真なども拝借・複写した。	
2. 研究によりどのような知見が得られたか (具体的に) この度の研究成果の主要な発見として、以下3つが挙げられる。 ① 同じ宮城県内被災沿岸部とはいえ、気仙沼市と仙台市では海岸線や後背地の地形、土地の歴史的背景、復興事業や防災・減災対策の方針等に違いがあり、仙台市沿岸部での参与型観察と聞き取り調査を通して、両市における自治体行政の対応の違いや、地区住民の取り組みを比較検討する枠組みを得た。 ② 防潮堤にて分断された海岸線の海と陸側において、専門家・研究者が続けている生態系モニタリング・調査に同行したことにより、復興事業が内包する社会経済問題を生態学的観点から考察する機会に恵まれた。同時に、被災地区住民の参与がどのような形で震災復興に反映・貢献されるかについても理解を深めることができた。 ③ 震災後11年を経て表面化した「当事者性問題」に遭遇したことにより、この言葉が抱える深層性を改めて熟考するきっかけを得た。特に、震災直後には存在しなかった「当事者 (性)」や、震災後の復興政策や移転により、住民としての「当事者 (性)」が宙に浮いている被災地がある現実を目の当たりにし、被災地におけるコミュニティ再生と行政の抱える難題への視座を得た。	
3. 研究成果 (予定を含む) ○論文 (題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略 (200字以内)) ・“What remains at the Disaster Ruins” 概略: 震災遺構という言葉に関する歴史的認識、震災11年を経た被	

災地の生態系環境が震災遺構に与え得る可能性についての論考。

○口頭発表（題目、イベントの名称、日・場所、内容の概略（200字以内））

・“「フクシマ」後のメディアとエコロジー”（STS and Japan @UChicago 2021年11月19日 東日本大震災復興記念前浜マリンセンター）

概略：福島原発事故後、英語圏メディアを中心に「ヒロシマ」「ナガサキ」を彷彿とさせる言説や脈絡の中で福島が語られ始めた。それに呼応するように日本語圏メディアにおいてもカタカナ表記による「フクシマ」が顕著になったことを背景に、カタカナ表記が示唆するものをメディア・生態学的に考察。

・“震災遺構が「語る」物語と震災遺構に「育つ」物語”（2022年1月7日 北海道大学・中村ゼミ）

概略：震災遺構が、生き証人として体現する東日本大震災にまつわる記憶から、震災以前・直後・現在に至るまでの生態系環境やその他の時空間的要素が排除されることにより、震災遺構自体が記号的意味論のみで認識される危険性について分析。

・ Society for Literature, Science, and the Art 2022 Annual Meeting: “Grounding Plant Intelligence: Ecology, Land, and Vegetal Life”内で発表予定（2022年10月6～9日, Lafayette IN）

概略：東日本大震災以前の宮城県沿岸部の景観は「白砂青松」を誇っており、そこには土地独自の歴史的背景や経済活動発展の軌跡、時として壊滅的ではあるが“恵み豊かな”自然と共に生活する人々の知恵や習俗が息づいていた。震災後インフラ整備が進む一方で、生態系の多様性やエコロジカルな防災・減災対策への重要性が喚起されている中、「白砂青松」再生への取り組みや意義について再考察。

・ 2022 American Anthropological Association Annual Meeting: “Dialectics of Ecological Design: Practitioners of Hope and Doubt”内で “Seeds of Hope in Post-Disaster Land”を 発表予定（2022年11月13～19日, Seattle WA）

概略：被災地区住民と地区外協力者が協働して進めている、防潮堤への自生海浜植物の植栽について、地域独自の宗教観や精霊崇拜に基づいた習俗を無形文化の伝承という観点から考察。

・ 2023 Association for Asian Studies Annual Conference: “Disastrous Infrastructures: Logics and Lessons of Reconstruction”内で発表予定（2023年3月16～19日, Boston MA）

概略：被災地の復興インフラ整備が、生態系と地域コミュニティに与える影響を検討。

4. 今後の活動予定

2022-23 年度、シカゴ大学で開催されるワークショップへの参加と、米国東海岸沿岸部の研究グループ調査サイトへの視察を計画している。ワークショップ・視察を通して、本研究期間中お世話になった日本の研究者と、米国の研究者たちの架け橋となる活動に繋げたい。

2022-23 年度に予定している口頭発表を論文としてまとめて、人類学、民俗学、もしくは日本学研究系の学術誌に投稿したい。

2023 年春以降出来るだけ早い時期に、気仙沼市と仙台市で続けられている生態系調査・モニタリング・植樹活動にて、参与型観察と聞き取り調査のフォローアップを行うとともに、引き続き、両地区の住民と元住民への聞き取り調査・関係資料収集と分析を実施する予定。